

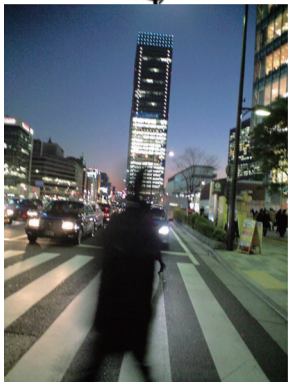
今年の春、京都で「レトロ京都」という昭和の土産物を買っているお店を見つけた。売り物の壺柄のグッズや水森アドのシール。懐かしいそれらの中に叔母さんから貰い美術モチーフにした人形に似た物があつた。

「西洋こけし」と勝手に呼んでいただけ「モダンこけし」という分類だと初めて知つた。私の時代にはぬいぐるみだったしね、さすがに。特に作家の作品ではないそれらに物の持つ POWER を感じた。

青春以前のオモチャは「大きくなつたら何になるか」と思つていた頃の時のかけらを運んでくる。もう十分に大きく（古く？）なつているのだけれど、どこかにそんな気持ちが潜んでいる。

なくなりつつある好きなテイストを、新しく細胞分裂していくように増やしていく。過去への郷愁だけでなく明日への祈りかなあ。

村田いづ実
(イザベルモナムール)



レトロ・ガーリー—村田いづ実の少女性をめぐる現在



村田いづ実の作業を評価するのはなかなか難しい。その一因は彼女が型としての完成を目指していないという点にある。理由は形式化することのつまらなさ、と彼女の答えも単純明快だ。レトロ・ガーリー。それは不図彼女の口を衝いて出た語であつた。

昨冬、あるギャラリーで村田のパフォーマンスを目にした。そこで彼女はコルセットを身にまとい、「仕事にいかなきや」等と呟きながら行きつ戻りつするのだが、奇しくもその時僕の頭には「少女性」という語が浮かんできた。それは彼女から発信された幾つかの象徴態が、一つの概念が対峙概念と折衝する中で明確化されようとする、それと似た作用でもって観客内に導き出された語であつたかと思われる。

しかし、やっと手にすることのできた彼女の作業を語るための鍵も、易々とは扉をあけてくれそうにない。というのも、「少女性」は少女の肉体と不可分であり、自然と未成熟とをその骨子としているらしいのだ。こうあつては、もはや男の僕ではどうにも歯が立たない。なにしろ、女の手を介して自然より切り落とされた始めのその所在なさがいまだに尾を引いてか、成熟を夢見て、男は論理性か、はたまた反転して攻撃性にその解消を求め続けるよりほかなかつたのだから。そのことは生殖器官が外付けになっていることとももしかしたら関係しているのかもしれない。僕にとって彼女の作業が難解だということも故あつてのことなのだ。男がいくら語つたところで、それは薄笑いを浮かべるか、もしくは聞かない顔でそれを受け流してしまうだろう。だから今僕が早断をすることは強姦をもって「少女性」の口をつぐませかねないことだとも言えよう。いや、真名で「少女性」と記すことすら憚られるのだ。とまれ、僕はその小心故にあえてこれに近寄らずにきたらしい。そのほとんど考えもしなかつた僕に苛立つてか、今ここにきて、発奮した村田を通じてガーリーの側から逆襲の憂目にあつている。あな、おそろしや。しかし彼女も無策で詰め寄つたわけではない。

レトロ・ガーリー。現時点で彼女自身がこれまでの20年強にわたる納まり所のない作業を総括しようとする中から抽出された語。それは、ガーリーという語の意味合いを、そう遠くない過去の共時帯に限定し選りだすことで、通時的な姿（輪郭）を導き出してゆく可能性を有しているように思われる。もしかしたらガーリーは性差自体が二元論の状態から解き放たれようとしているのと同じくして、今日、村田いづ実の作業を通じて、少女の肉体にのみとどまる時分の花から、まことの花へと昇華を試みようとしているのかもしれない。



中西レモン・肩書き未定



村田いづ実とイザベル・モナムールあるいは歓待の「部屋」への招待状

派手な色調が乱舞する部屋には、季節外れのイーजीリスニングの甘く感傷的な旋律が流れている。気怠い日常の澁が堆積したこの部屋で、罨にかかる蝶を待つ蜘蛛女のように待機する女主人、それが村田いづ実だ。時にもの静かに佇むかと思いきや、突然、偉大なダンサーの身振りを大胆かつ痙攣的に体現したり、あるいは、感情移入を拒む自動人形の無機質な運動を繰り返す。村田いづ実、お前は誰だ？

『泉』の作者マルセル・デュシャンが「ローズ・セラヴィ」という名の「女」であつたように、彼女は、「イザベル・モナムール」という名の偽のフランス女／シャンソン歌手でもある。二人は、一心同体、つねに複製形で、60年代から70年代の時空間を好奇心のおもむくまま、方々を旅して廻る。かくして、蒐集した記念写真やスタンプ、奇矯なスーヴニールがところ狭しと飾られ、色とりどりの少女趣味が思い入れたっぷりに横溢する「イザベルモナ ROOM」という名の複製の楽園が開室する。埃まみれの蠟細工だけれど、おいしそうなパフェ、宙に浮いたフォークとスパゲッティを嬉々として並べて、村田いづ実と「イザベル・モナムール」の二人は、いつでも歓待の準備に余念がない。

この部屋は、二人によく似ている。ダンサー、美術家、インスタレーション作家、謎の販売員、等々いずれでもある村田いづ実、偽のフランス女／シャンソン歌手「イザベル・モナムール」とともに、この世界を二人の部屋に似たものにしてと秘密の計画を立て、今や着々と実行に移しているようだ。知らぬ間におみやげのスタンプを押されてしまったら、もう手遅れだ。招待客は部屋の一部となつてしまうのだから。遠くない未来、われわれは、いづ実=イザベルの烙印が、至る所に氾濫する黙示録的な光景に立ち会うのかもしれない。そのとき、地球は二人の「ROOM」となるだろう。それを喜ばしき桃源郷と見るか、まがいものの支配する複製の廃墟と見るかは、その部屋の招待客しだいだ。



坂尻昌平・映画評論家